「りゅうま伝」は高野の分身がお客様のところへご挨拶に伺う。という氣持ちでお届けしています。

りゅうま伝

13号
2020年12月26日
高野竜馬

「年賀状の思い出」

クリスマスを過ぎると、年越しへカウントダウンが始まりますね。今年一年お世話になった方へ感謝の氣持ちを込めつつも宿題のように年賀状を書いている方も多いのではないでしょうか？焦って慌ッカリ喪中の家に出さないよう、ご注意ください。

実は私には苦い思い出があります。忘れもしない2011年のことです。書き上げた年賀状を少しでも早くと、ポストに投函した帰り道、喪中のご家庭に出したことに氣づいたのです。

それは東日本大震災の年。昔、お世話になった先輩が、岩手県の三陸海岸沿いのご出身であったことを思い出したのです。

ご本人から直接、ご親族が亡くなったとは聞かなかったものの、風の噂で相当な被害を受けたと聞きました。

家に帰ると至急、郵便局に電話して、該当の年賀状を取り出してもらったことがあります。仕事だけでなく、遊びもよく連れて行ってくれた先輩でした。

「いいか、高野、津波ってのは怖えんだぞ。俺んとこの村じゃ、こんなとこまで津波が来たって標識があるんだぜ！」

在職時代から津波の怖さを語っていただけに、さぞ複雑な心境だったろうな、と思いました。

その先輩が今年9月にてくなりました。享年59歳。退職後20年以上、ろくに話したことが無いものの同期から危篤の知らせが入り、それから2週間で旅立たれました。

葬儀後、奥様からお電話を頂いた時には何の言葉も出てこず、逆に初めて話す奥様から「主人が生前よく『高野がよ～、高野がよ～』ってお話伺ってました」と聞いて、その口ぶりが、あまりに故人そっくりで、どちらが遺族かわからないくらい号泣してしまいました。

そして最後に「来年、我が家は喪中になり、年賀状を皆さん控えられるでしょう。もし、良かったら高野さん、年賀状を頂けないでしょうか？近況を主人に報告して欲しいのです。」と言われましたので、この一年、家族で楽しみ尽した写真年賀状をお送りします。

さて、人は2度死ぬのだそうです。一度目は肉体が滅びた時、そして2度目は故人の記憶が忘れ去られた時。だから亡きんを亡きままにしてはならないと今年どこかで習いました。よって最後に先輩との思い出を披露します。

エンジニア時代、私のミスで重要なデータを消去してしまい一晩中、手伝ってもらって、見事にデータを復元させたことがあります。自分のミスも忘れ「こんなことが出来るんですね～」と無邪氣に喜ぶ私に一言。

「いいか、高野、こんなこと出来たら良いな～って思うことは大体出来るようになってんだよ」

先輩、僕は窮地に立たされた時、いつもあの時の事を思い出します。

これからも応援してください。

感謝 合掌

感謝之印

たかの財形事務所
〒819-0374 福岡市西区千里 707-13
090-3407-2123
https://www.takanozaikei.com メール fp.takano@gmail.com

良いお年を お迎え下さい！